

日韓政治思想学会第5回共同学術会議

松田宏一郎（立教大学）

第5回目を迎えた日本の政治思想学会と韓国政治思想学会の共同学術会議は、2006年5月19日・20日、ソウル大学国際大学院国際会議室において開催された。主催は、政治思想学会（日本）・韓国政治思想学会・ソウル大学国際問題研究所、また日本万国博覧会記念機構およびソウル大学の後援を受けた。韓国政治思想学会は、創立11年を迎え、年次大会以外にも頻繁に研究会などもたれ、活発な活動をおこなっている。

本年の共同学術会議の全体テーマは、昨年京都で開かれた第4回会議の際に参加者の間で話し合われた企画案に沿って、「東洋と西洋の政治思想における正義観」となった。今回は、日本や韓国の政治思想そのものを対象にするだけでなく、「正義」というきわめて今日的で論争の多い概念について、日韓の「国」の意識から離れて政治思想研究者としての様々な専門的視点から検討を加えてみようという狙いでテーマが設定された。

プログラムは以下のようなものであった。

開会の辞 張寅性（ソウル大学国際問題研究所長）

歓迎の辞 姜正仁（韓国政治思想学会会長）

祝辞 小野紀明（政治思想学会代表理事）（代読）

第1会議 「伝統的な正義観」

司会：金弘宇（ソウル大学）

報告：李元沢（延世大学）「朝鮮時代における正義観の一断面」

中田喜万（学習院大学）「伊藤仁斎の『命』と『学』：ある反基礎づけ主義の出発」

李相益（霊山大学）「正義観の衝突と変容：近代韓国の正義観」

討論：李承煥（高麗大学）、高熙卓(GCRI)、金鳳珍（北九州市立大学）

第2会議 「西洋正義論の受容と変容」

司会：松田宏一郎（立教大学）

報告：張東震（延世大学）「西洋正義理論の東アジアに於ける受容：ロールズ『正義論』の韓国的理解」

宇野重規（東京大学 社会科学研究所）「現代正義論復興の意義とその適用可能性：アメリカ・フランス・日本」

討論：杉田敦（法政大学）、金善郁（崇実大学）

第3会議 「植民地統治と正義」

司会：金鳳珍（北九州市立大学）

報告：金容植（誠信女大）「日本の韓国植民地統治と正義の問題：斉藤実総督の支配時期」

梅森直之（早稲田大学）「総督府の警察制度における統治実践と正義」

討論：松田宏一郎（立教大学）、鄭根植（ソウル大学）

第4会議 「現代社会と正義」

司会：李鍾殷（国民大学）

報告：斉藤純一（早稲田大学）「現代日本社会における格差/分断と正義」

朴義卿（全南大学）「女性と国際正義：新しい国際秩序のための提言」

討論：金飛煥（成均館大学）、杉田敦（法政大学）

第5会議 「現代韓国と正義」

司会：崔丁云（ソウル大学）

報告：堀真清（早稲田大学）「韓国民主化と池明観」

文智暎（西江大学）「現代韓国の近代化・民主化と正義：『正義』の角逐様相と『正義社会の具現』の函数」

討論：全宰鎬（西江大学）、金鳳珍（北九州市立大学）

簡単に各パネルで提起された問題を紹介しておく。第1会議は、朝鮮および日本社会において、前近代もしくは近代化初期における望ましい価値の分配や損害の回復の理論構成を、西洋の正義論と比較しつつ検討したものである。李元沢氏の報告は、アリストテレスの「応報的正義」観と朝鮮期の「復讐」観との比較をおこない、中田喜直氏は、伊藤仁斎の道徳的価値の根拠についての思想をローティの **anti-foundationalism** の概念によりつつ分析し、李相益氏は近代化初期において西洋思想に対抗する朝鮮固有の正義観を追い求めようとした思想家たちの葛藤を検討した。

第2会議は、ロールズの正義論が韓国および日本のアカデミックな政治理論研究の中でどのように扱われてきたのか、そこに欧米とは異なる特徴が見いだされるのかが検討された。張東震氏は、韓国における最近のロールズ理解の変化と特徴を論じ、宇野重規氏は、アメリカとフランスでの正義論の捉え方の違い方を明らかにしつつ、日本から見た「西洋的」な「正義」概念という捉え方そのものを相対化した。

第3会議は、日本の植民地統治が、そこで実現しようとした「正義」のイデオロギーは何だったのか、またそれはどのように機能し、また機能不全を起こしたのかが、政治史的に、また政治理論的に議論された。金容植氏は斎藤実総督期に即して、梅森直之氏は朝鮮警察行政の理念構成を検討することで、その問題を分析した。

第4会議は、現代の日本と韓国社会における社会の分裂や性差別の問題を手がかりに、市民社会の危機をとらえる普遍的な枠組みの可能性を論じた。齋藤純一氏は、現代日本のいわゆる「格差社会」問題をてがかりにその理論的含意を検討し、また朴義卿氏は韓国のジェンダー研究の現状と世界的なジェンダー理論の展開との連携の可能性を論じた。

第5会議は、韓国の民主化運動の展開を踏まえながらその思想的意義を、日韓の報告者が論じた。堀真清氏は、池明観の思想を扱い、文智暎氏は朴正熙政権と全斗煥政権の掲げる「正義」の変化を論じると共に、軍事独裁に反対する思想における「正義」観の変化も検討した。

今回の会議を全体としてやや乱暴に概括すれば、日本側の報告者・討論者は、「正義」概念の相対性や多様性に関心を強く持ち、韓国側は、本来の普遍的「正義」が歴史的現実の中で損なわれてきたという捉え方に傾いている。この視座の違いは、時折お互いに主張の狙いが理解できない場面も生んだ。しかし、「正義」観が、多様であるからこそ、国家や文化などといった枠組みにおさまらない可能性を見いだすことができ、他方十分に説得的な「正義」概念の再構成と共有に期待をかけることによって、従来の「正義」理論が隠し持っている地域的・歴史的特性をあぶり出すことに成功すれば、アプローチの違いはむしろ相互に補強し合うことにつながるのではないかと思われる。このことがそれとはなく参加者に気づかれていたためではないかと思うが、参加者が「日本」や「韓国」を背負って議論することがあまりなく、それは好ましいことであり、またこの共同会議の成熟を感じる点であった。

次回の会議は日本でおこなわれる。全体テーマは **constitutionalism** の再検討を中心にする案で準備を進めている。